

戦後における神前結婚式の隆盛と儀礼の交代

國學院大學神道文化学部教授

石井 研士

はじめに

現在、通過儀礼のなかでもっとも重要な意味を持っているのは、まちがひなく結婚式である。戦後、多くの伝統的な儀礼が変容、衰退していったが、結婚式は戦後になって日本人の間で一般化し定着した儀礼である。こうした点は、結婚式を成人式や葬儀と比較してみれば明らかとなる。

成人式は生活者としての自覚を促す機会であり、成人式を経ることによって一人前の主体性が確立できると考えられていた。成人式は子どもが社会の構成員となったことを本人と社会が認識する儀礼であり、しばしば苦行にも似た困難さをともなうて自らを鍛錬させた上で自立・自己修養させる機会であった。成人式を経ると、前髪を切り落とす、衣類の袖を短くするなど服装や髪型が変わり、若者組や娘組への加入が認められ、神事に参加することが許された。外形的にも大人の仲間入りしたことが明確に表示された。しかしながら現在の行政が主催する成人式には、大人になるための肉体的精神的試練も見られなければ、髪を上げたり着物が変わるなどの外形状の変化も見られない。現在の成人式は、主催の主体が地域共同体から行政へと移行したことに象徴的に示されているように、もっぱら個人の内面

的自覚の促進と法的地位の發生を主とするものである。我々は比較的短時間の間に、子ども・青年と大人の境を意味する儀礼を失ってしまったのではないか。

葬儀も葬儀を支えてきた「家」の変化とともに、その儀礼は多様化し変化しつつある。葬儀は、家ではなく葬祭場や会館で営まれるようになった。野辺送りが消え告別式中心の儀礼となっている。年忌法要の年限は短くなり、位牌の代わりに遺影を置くなど、メモリアリズムの様相が強くなっている。

神前結婚式は戦後になってから隆盛を見た。²⁾戦後民主化が進み、伝統的なものへの関心が薄れていく中で、神前結婚式はがぜん国民的儀礼となったのであった。そして昭和の終わり頃から減り始めた神前結婚式は、その地位をチャペルウエディングに奪われることになった。この間、日本人の人口に占めるキリスト教徒の割合は一パーセントほどで、とくべつ変化があつたわけではない。

儀礼が形式と等視される傾向が強い中で、なぜ結婚式に関しては、神前結婚式の隆盛を見、神前式からチャペルウエディングへと交代していったのだろうか。欧米のように宗教者の関与しない婚姻登録だけの結婚が増えてもおかしくはなかつたはずである。

宗教社会学者のブライアン・ウィルソンは、現代社会における世俗化の具体的な事例のひとつとして、結婚式の變化を指摘している。

宗教事情の劇的な変容が最近の比較的短い期間にも起こっているようである。…あらゆる証拠が超自然的なものへの信仰の衰退傾向と、超自然的なものが現代人の日常生活に何らかの有意義な影響を及ぼしているという考えを否定する傾向を示している。教会を郵便局的なものとして把えることが一般化したために、通常はあまり教会に行かないが、それでも必要な時には教会を利用すればよいという考えを多くの人々が抱くようになった。…今では、

◆—イギリス国教会及びウェールズ教会 ■—結婚登記のみ (Civil Registry)

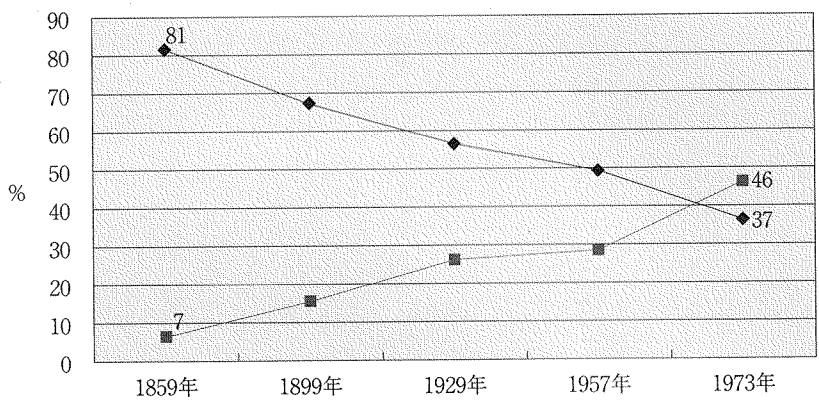


図1 教会結婚式の変化

そのような形で教会を頼ることすら少なくなっていることを示す兆候が現れている。…かつては、あまり宗教的でない人々さえも、教会で結婚式をあげることがしばしば望んだ—それは真の伝統というまさにその感覚が、かれらをひきつけたのである。しかし今日では、その魅力すら消え失せてしまったようである。³⁾

イギリス国教会及びウェールズ教会による結婚式は、一八五九年の八一パーセントからしだいに減少し、一九七三年には半分以下の三七パーセントとなった。他方で結婚登記のみは、七パーセントから四六パーセントへと増加した。図からすると、一九六〇年代の終わり頃か七〇代の初めに結婚式の形態の交代が生じたことになる。

ウィルソンの指摘とイギリス国教会及びウェールズ教会による結婚式の減少を、そのまま戦後の神前結婚式の分析にあてはめても、さほど違和感はないかもしれない。つまり、通常は神社に行かないが、七五三や厄よけ、合格祈願など必要ときに神社に行けばよいという考えを多くの人々が抱くようになった。そして今では、そのような形で神社を頼ることすら少なくなっていることを示す兆候が現れている。かつては、あまり宗教的でない人々さ

えも、神前結婚式をあげることをしばしば望んだ―それは真の伝統というまさにその感覚が、かれらをひきつけたのである。しかし今日では、その魅力すら消え失せてしまったようである、と。

しかしながら実際にはそう簡単に比較できないのである。たとえば、イギリスでの教会結婚式の割合と結婚登記のみの割合が交代するまでに一一〇年余りかかっているが、日本では八割の実施率だった神前結婚式が二割余まで減少するのに一五年ほどしかかかっていない。神前結婚式自体が明治以降に新たに作られた儀礼であり、一般への普及は第二次大戦後になってからのことである。そして、神前結婚式の減少と同時にチャペルウェディングの増加が進行し、全体としてみれば、宗教と関わる挙式自体に変化が生じなかった点は、大きな相違点である。

こうしたことは、改めていくつかの疑問を提起させる。なぜ近代になって神前結婚式は生まれたのか。なぜ一般に普及したのは第二次大戦後なのか。そして、なぜ最近になって神前結婚式は減少しチャペルウェディングが隆盛になったのか。本論では、日本の社会制度と日本人の価値観の変容を背景として、戦後の儀礼文化の変容を結婚式を通して考察することにした。とくに戦後の神前結婚式の定着過程とその理由、チャペルウェディングへの交代の時期とその理由の二点に限定して、個々の研究者の根拠を検証し、データに基づく論考を展開したいと考えている。

一、神前結婚式が隆盛となった根拠をめぐる検証

ところで、戦後の神前結婚式の急速な普及とチャペルウェディングへの劇的な変化を正確に把握しようとする、意外にも困難であることに気づくことになる。戦後という極めて近い過去であるにもかかわらず、また、民俗学では日本人の通過儀礼に関する多くの調査と考証が行われてきたにもかかわらず、戦後の結婚式に関する調査研究にはほとんど関心が払われてこなかった。

本論の具体的なテーマである戦後の神前結婚式の急速な普及とチャペルウエディングへの劇的な変化について、言及しているのは、井上忠司「結婚風俗の変遷——「神前結婚」を中心に」（昭和六年）⁽⁴⁾、色川大吉「転換期の婚姻儀礼」（平成二年）⁽⁵⁾、志田基与師「平成結婚式縁起」（平成三年）⁽⁶⁾、そして平井直房「神前結婚の歴史と課題」（平成二年）⁽⁷⁾である。なお、筆者は平成一〇年に拙書「戦後の社会変動と神社神道」（大明堂）の中で「結婚式」の章を書いているが、本論での考察の下敷きになっている。

神前結婚式に関するまとまった論考を行った井上忠司は、意外にも主張の根拠を明示していない。井上は繰り返し神前結婚式が戦後に盛んになったと指摘している。「神前結婚」は：明治の後期にはじまり、大正から昭和にかけて普及し、戦後に決定的にひろまったものである。それはとくに、イエ制度の分解がすすむ都市部において発達し、イエ制度がより多く残っている農村部では発達がおそかった。農村部でも急激に増えるのは、戦後も、とりわけ、高度経済成長⁽⁸⁾以後のことである」と述べているものの、「とりわけ、高度経済成長、以後」である時期に関する理由は示されていない。

井上は、神前式が隆盛になった理由を二点挙げている。第一は「簡略」であるということである。神前結婚式が行われる以前の人前結婚式では、地方や家ごとに異なった複雑で長期間にわたる儀式が行われ、そのために多額の費用が必要であった。数時間で終わる神前結婚式は、主催者にとつても参列者にとつても簡略であったという説明である。第二は「荘厳な雰囲気」である。「人生はまた、人生設計の重大事にぞくする。神前という格好の舞台で、厳粛のうちにとりおこなわれることは、まことに意義ぶかいといわなければならない」。井上は、「大正期の新聞は、神前結婚が喜ばれた理由を、ひとしく右のように伝えている。当時の人びとが神前結婚に託した社会心理は、およそ、この二点に集約されているものと思われる」と結論している⁽⁹⁾。

文脈からすると、神前結婚式が普及したとされる上記の理由は、戦後の神前結婚式の本格的普及の根拠としても考

えていい。しかしながら、戦後に言及した部分において議論は錯綜し矛盾を生じている。戦後、神前結婚式は「封建遺制」として若い人たちに受け取られるようになったという。井上の指摘する理由は二つで、若い人たちの間に戦中に国家と結びついた神道を排除しようとする意識が強く働いたこと。いまひとつは、神前結婚式が「○○家」と「××家」の結婚式と掲げられているように、戦前からのイエ制度を引きずっているように意識された点である。

それではなぜ封建遺制と意識された神前式が「とりわけ、高度経済成長、以後」盛んになったのだろうか。井上は、国家と神道の結びつきが希薄になるにつれて神前結婚式は再び盛んになっていったと述べている。さらに冠婚葬祭の産業化・商業化が拍車をかけたという分析を加えている。「披露宴に力点をかけるとなると、いきおい、その会場にも神聖な装置がなければならぬ」。井上によれば、「結婚産業は、戦後の人前結婚に欠けていた神聖さをとりもどして、たくみに演出してみせることに成功した」と述べている。井上は神前式がある時期、伝統と見なされた人前式に対してハイカラであったから普及したといいながら、他方で神前結婚を挙げる人々に「伝統」や「家」の残存が見られると指摘する。また、結婚産業こそが披露宴重視の傾向を助長させながら、神聖さを盛り込んだ「新しい神式結婚」を作り出したとも強調する。

封建遺制として認識されていた神前結婚式は、十数年の間に国家と神道の結びつきが希薄化するにつれて、人々にハイカラな様式として受け入れられた、という説明は説得力に欠けるのではないか。後述するように、明治記念館での結婚式は二〇年代半ばから増加していく。井上自身が、今日相もかわらず「○○家」の看板を見るのであるから、「現代の若い人たちからは、とくに反論もないのであろう、⁽¹⁰⁾イエ」は依然として私たちの意識の底に根強く横たわっている」と述べているように、現在でも神前結婚式には「家」のイメージは残っている。

井上の指摘に関する不満は、第一に神前式が増加していくプロセスの特定が曖昧である点にある。戦後の神前式の普及の時期、理由がさわめて一般的な考察に終始しているのである。それはとりもなおさず、普及の時期や理由の明

確な根拠が示されないためである。第二は、神前式自体が当時の人々に提示した意味が問われていない点に不満が残る。なぜ戦後の人々がわざわざ神前式を選んだのか。井上の言葉を借りれば、なぜ結婚産業は結婚式に神聖さを取りもどさなくてはならなかったのか。なぜ人々は「荘厳な雰囲気」を必要としたのだろうか。それは戦後のある時期の人々が望んだからであって、結婚産業が無理やり導入を義務づけたわけではない。⁽¹⁾人々は、披露宴とは異なった宗教者の司る「挙式」を必要とした。披露宴の他に、挙式としての儀礼の付加を望んだのである。しかしながらその一方で、結婚式を挙げるカップルは、信仰の表明として神前結婚式を選択したわけでもない。自覚的意識的ではないが、儀礼によって表明される宗教性の意味に対する関心の欠落が、井上の論文を不鮮明なものとしている。

色川の論文では、具体的な調査結果が報告されている。色川は「婚礼の形式も、一九六〇年代を境として、大きく変貌したといわれながら、実際にそれを調査した報告は意外に少ない」として、婚礼調査を実施しているのである。⁽²⁾調査は、色川が所属する大学のゼミの学生二六名に対して、両親の結婚当時の状況を聞き取り調査をさせたものである(実際の分析対象は二三組)。調査はアンケート調査で、基本項目、結婚にいたる経緯、式の当日、式の後の四つに分かれて合計二八問からなっている。

学生の両親は大多数が昭和三八年から四三年の間に結婚していた。挙式の形態は、九割が神前式であとの一割ほどがキリスト教式であったという。挙式のスタイルを選択した理由は質問されていない。

色川の論考には、井上の分析に欠けているこの時期に結婚した者に関する分析が見られる。昭和三八年は東京オリピックの前年であり四三年までの六年間は昭和元禄の開花にいたる六年間であるという。昭和四三年には日本はドイツを抜いて世界第二位のGNPを誇るようになる。同時にこの時期結婚式をあげたカップルは、六〇年安保世代から昭和四三・四四年の全共闘世代の間に生きた若者たちで、「安保闘争、反軍事基地闘争、ベトナム反戦運動、ピートルズ旋風、グループ・サウンズ、反公害・自然保護等の市民運動、全国を揺るがした学園闘争など、彼らが主役に

なった運動は枚挙にいとまがない。」回答から見られるカップルはきわめて自立志向が強く、「当時の式の意味をどう考えるか」という問いに対して「簡素であっても、今のような大金をかける結婚式とは違って、本質を追究できたことに満足している」と答えている⁽¹³⁾という。

色川の調査はわずかに二三組によるものであるが、もし、その時期に結婚した人々の意識は、時代のせい、か、きわめて積極的で、儀礼の決め方についてもいちじるしい自主性がめだつ。それは現代の若者一般よりはるかに進歩的であるといえる、とすると、進歩的で積極的に自主性のめだつ若者が、結婚式の本質を追究し、神前結婚式を選んだことになる。先の井上の指摘する「家」意識が残存する、結婚産業に踊らされたカップル像とはまったく異なった姿が描き出されることになる。それでは、当時の若者が選んだ神前式の意味とはいったい何だったのだろうか。残念ながら色川は、神前式が九割という事実と、上記のような若者の時代的性格との関係には言及していない。

志田基与師も色川と同様に、大学の講義の受講生に対して「結婚式・結婚披露宴の儀礼に関する調査」を実施している。回収数は一六七通であった。著書にはアンケートに関して、調査対象に関する基本的項目、調査時期、質問項目一覧等、集計結果は掲載されていない。

志田が、神前結婚式は高度経済成長期に全国に普及した、という時の根拠は以上の調査である。志田は、戦後神前式がポピュラーになったのは、神道が普及したためではないと言う。「その逆に神道の宗教的な意味が、決定的に欠落したから」である⁽¹⁴⁾。

各地に続々オープンした結婚式場は神前結婚式を採用しましたが、それは料金を明示した、サービス業としての結婚式でした。神職は、こと結婚式に関してはサービス業なのです。料金を払って手続きを踏めば、結婚の証が得られるのであり、そこには一瞬でも神聖な権威が夫婦の間に介在している、という感覚はありません。神前結婚式

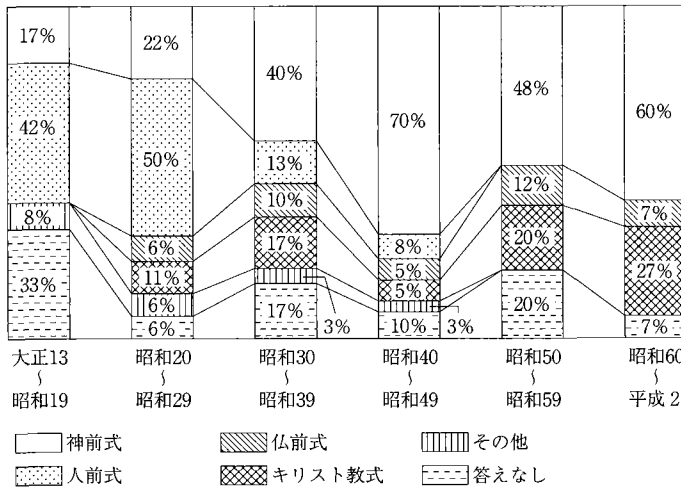


図2 挙式の形態（志田）

は完全に擬制（形だけのもの）となったのです。

神前結婚式が採用されたのは、宗教的な理由からではなく、まったく世俗的な理由からです。都市生活者には共通の儀礼もなく、自宅で結婚式をやるにしても、三日もの宴会をすることはできませんし、第一、都会では自宅に大勢の人が集まれる余裕がありませんでした。地方でも他に大勢の人が集まれる場所がなかったから、自宅で結婚式を挙げていたのです。しかし、高度経済成長は、そういう相互扶助のシステムもどこかに置き去りにしています。

つまり、神前結婚式の「大衆化」には、その一つの側面である、簡便（強いてあげれば安価も）が強く作用したといつてよいでしょう。⁽¹⁵⁾

神前結婚式の普及が商業的な動機によるものであって、神前式の挙式は付け足しにすぎないという分析は、先に引用した井上においても指摘されていた。付け足しにすぎない挙式のために、時間と費用をかけるのは、論旨からいっても納得のできる説明ではない。伝統的な結婚式の形態では挙式の部分は行われていなかったのであり、戦後挙式としての神前式結婚式が定着

していったことは、やはりそれなりの理由が存在するからに他ならないのではないか。志田の分析にも、儀礼の持つ宗教性に対する関心が欠落している。

神道学者の平井直房は、志田のアンケート調査を引用しながら、アンケート調査の対象の選び方、規模の小ささに危惧を表明しながらも「大筋の流れはこれで知ることができる」として認めている。⁽¹⁶⁾その上で、明治記念館提供のデータと全国結婚式協会のデータ、『BB白書』のデータという具体的な数値の変化を示している。

平井はなぜ明治以降神前結婚式が展開できたかその理由を三点挙げている。平井の分析は室町時代から説き起しているが、そこでの分析は戦後の神前結婚式の隆盛の理由でもあると考えられる。第一の理由は、「神前結婚式は結婚という人生の大きな節目とその後の生活を、神々にお守りいただくこうとする願いから展開して行く」というものである。室町時代頃から日本人の間に道を求めようとする意識が高まり、これと関連して身近な生活に神々の加護を仰ぎようとする気持ちが顕在してきた。こうした機運が家庭の祝い事に結実したのが神前結婚式であるという。

第二の理由は「神道の近代化への対応の一つ」である。明治時代に神宮奉斎会などの人々が「従来の結婚式が余りに繁文縟礼に流れて」いることを嘆き新方式を奨励した、という引用をしながら、神前式のやり方が質素かつ優雅であると述べている。第三の理由は、とくに戦後に関して「殊に戦後の神社や会館における神前結婚式は、大部屋が殆どない全国的な新しい住宅事情にマッチするものであったということです」と指摘している。

平井の分析で問題となるのは、神前式が隆盛となった理由が大きな思潮の指摘によるものであって、社会構造の変化と関連づけるのが困難な点である。

以上の四人の研究者の検証から明らかなように、意外にも戦後の神前結婚式の普及を指摘する研究者の根拠はそれほど確かなものではないことがわかる。戦後、神前結婚式が人々の間に受容されていく具体的な過程がある程度は明らかにならないと、研究者の分析視点が先行して現実が解釈されていくことになる。

二、戦後の神前結婚式に関する資料の検証

次に、戦後の神前結婚式の定着を示すデータを列挙し、その定着の理由を考察する。併せて、なぜ短期間の間に神前式からチャペルウエディングへと移行したかについてもデータの確認を含め考察することにした。

先に引用した論文以外で、筆者がこれまで収集した戦後の挙式数やその実態に関する調査データを古い順に列挙すると以下ようになる。

一、全国結婚式場協会アンケート調査 昭和五四年～平成六年⁽¹⁸⁾

全国結婚式場協会は昭和五二年に全国の主要な結婚式場の経営者たちが設立した協会である。教会は昭和五四年以降平成六年まで毎年、全国の結婚式場およそ八〇〇カ所に対して結婚式場経営に関するアンケート調査が実施された。この調査の一環として毎年、都内の主要結婚式場で挙式予約したカップル三〇〇〇組を対象に講演の招待状を送付し、受講したカップルに対して挙式の様式や披露宴の費用などに関する質問を行った。⁽¹⁹⁾

二、『BB白書』BICブライダル調査 平成二年～平成二二年⁽²⁰⁾

調査は、BICブライダルの母体である株式会社齊憲が直接業務として関わった挙式または披露宴を執り行ったカップルの中から、ランダムに抽出したカップルに対して実施された。方法はアンケート調査で、アンケート用紙は郵送により回収した。後述する『ゼクシィ』と同様に、質問数が多く、調査の継続性を含めて、貴重な資料である。

三、三和銀行調査 平成五年～一〇年⁽²¹⁾

三和銀行（現UFJ銀行）では暮らしに関する様々な情報に関して調査し、調査レポートを公開していた。「挙式前後の出納簿」もそうした調査レポートのひとつで、平成五年から一〇年まで毎年、結婚式に関するさまざまな質問が実施された。調査対象はある期間一年間に結婚した夫婦で、郵送によりアンケートが送付・回収された。平成一〇年の場合は平成九年五月から平成一〇年四月の間に結婚した夫婦四〇〇組にアンケートが送付され、一〇五組（二六・二％）が回収された。

四、ゼクシイ調査 平成六年～平成一五年⁽²²⁾

株式会社リクルートのゼクシイ事業部は、平成六年から毎年、極めて詳細な結婚に関する調査を実施している。もともと基幹的な調査は「結婚トレンド調査」であるが、その他にも平成九年には海外ウェディング実態調査、レストランウェディング実態調査、「成約者」ハガキ調査、リゾート挙式に関する調査を実施するなど多様である。平成一五年の調査を例にとると、北海道、東北、北関東、首都圏、東海、新潟、長野、北陸、静岡、関西、広島・岡山、九州の平成一四年四月から平成一五年三月までに結婚した『ゼクシイ』読者一〇四〇〇名の中からランダムサンプリングにより、四九〇〇組を集計している。これまで実施されている結婚式に関する調査の中でも、もともと規模の大きい継続的調査であり、結果は十分に信用に足るものである。

五、経済産業省特定サービス産業実態調査⁽²³⁾

サービス業界の実態を明らかにし、サービス産業の施策のため基礎資料の獲得を目的に特定サービス産業実態調査が実施されている。特定サービス産業には、クレジットカード業、葬儀業、カルチャーセンターなどの業種があり、

結婚式場業の調査は平成八年と平成一四年の二度行われている。調査対象は経済産業大臣が指定した挙式場と披露宴会場を有する事業所（ホテル業を含む）で、挙式のみ披露宴のみを行う事業所と国・地方公共団体の直営の事業所は調査対象外となっている。調査は都道府県知事が任命した特定サービスマン産業実態調査員と郵送で、平成一四年の調査では二八五カ所から回答を得ている。この調査は他の調査とは異なっており、結婚式を挙げたカップルへの調査ではなく、式場自体への調査である。

以上の他にもう二点ほど挙式の変化に関する資料として注目したい。ひとつは財団法人東海冠婚葬祭産業振興センターによるいくつかの調査であり、今ひとつは明治記念館の挙式数に関するデータである。

財団法人東海冠婚葬祭産業振興センターは、東海地域の冠婚葬祭産業等の振興の指針とするために冠婚葬祭儀式と冠婚葬祭産業に関する調査研究を行っている。平成七年から一冊ずつ調査報告書が刊行されている。その中でも、『20歳前後の女性が思い描く挙式・披露宴調査』（財団法人東海冠婚葬祭産業振興センター、一九九八年）と『東海地域の未婚男女の結婚に関わる儀式に対するニーズ』（財団法人東海冠婚葬祭産業振興センター、二〇〇一年）は結婚を希望するカップルの結婚という儀礼に対する態度・意見が表明されていて興味深い。²⁴

明治記念館は平成一〇年に明治記念館五十年誌編纂委員会『明治記念館五十年誌』を刊行している。ここには昭和二二年からの明治記念館で実際に執り行われた挙式数が図示されている。昭和二二年に開館されて以来、日本を代表する結婚式場である明治記念館の挙式数の変化は非常に重要な資料である。

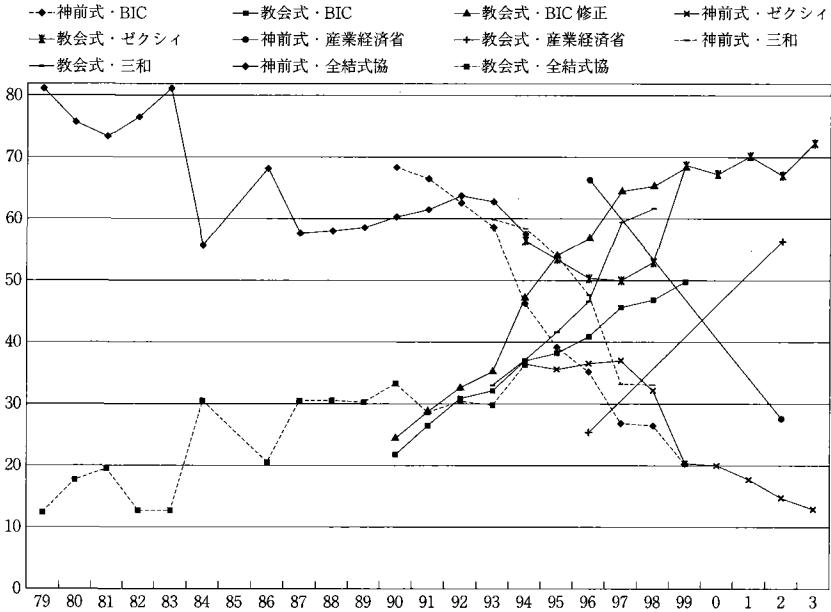


図3 挙式形態の変化一覧

三、いつ神前結婚式は普及したのか

以上のデータを利用して神前式と教会式の割合の変化を図示すると図3のようになる。

図3から明らかのように、昭和五〇年代には神前結婚式が一般化していた状況が理解できるが、戦後のどの時期に神前結婚式が隆盛になったかを明確に特定することはできない。しかしながら、戦後の神前結婚式の増加に関しては明治記念館の資料によっておおよそ裏付けることができる。

明治記念館は昭和二二年一月に明治神宮の結婚式場として公開された。戦後の宗教制度の変更に伴って、明治神宮は昭和二一年五月に宗教法人となった。宗教法人としてスタートした明治神宮は「自立への道を探り、そのひとつとして神前結婚式場を開設する計画を立てた。…当時、東京には戦争のため結婚を遅らせていた人や、外地から引き揚げてきた人、田舎に疎開して帰ってきた人などがたくさん

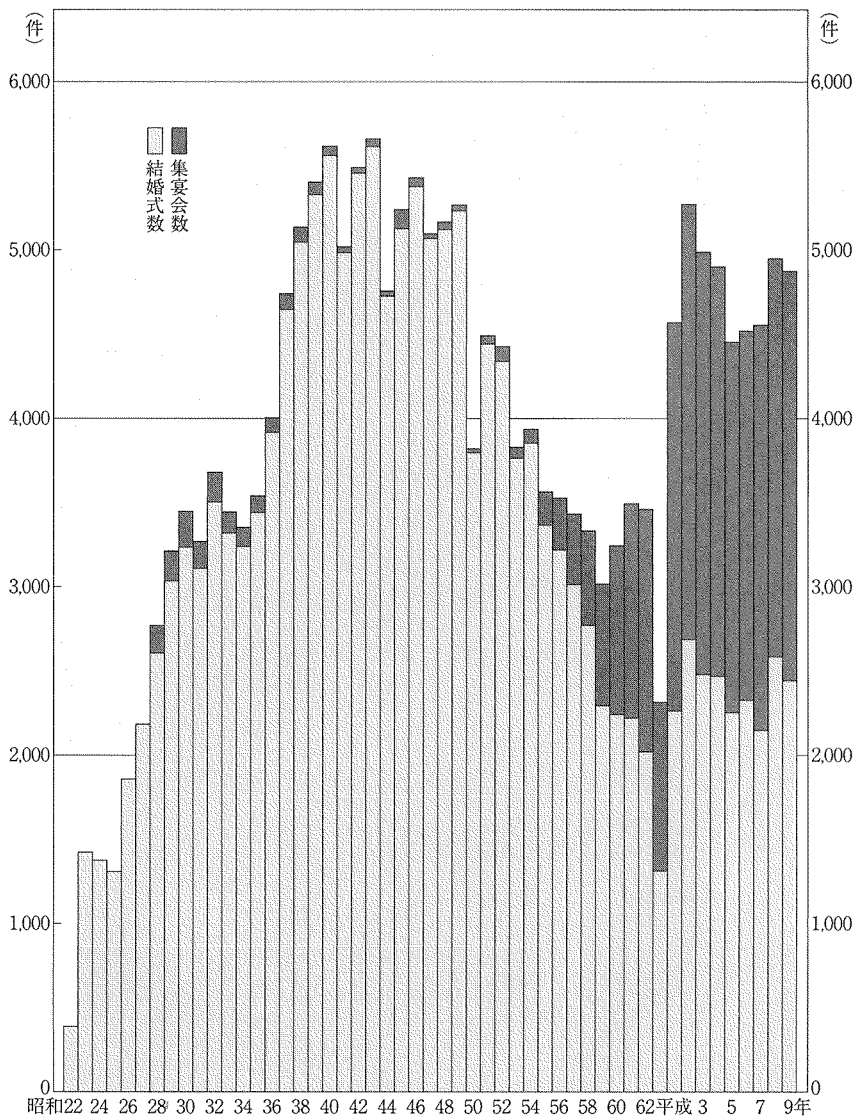


図4 明治記念館の挙式数の変化

て、結婚が差し迫った問題となっていた。家で式をあげようとしても、空襲で焼けてしまい、あるのはバラック建ての狭く粗末な家だけだった。そのような若い人々に結婚式の場を提供しようというのが明治神宮の計画であった⁽²⁵⁾。すでに、昭和二十一年一月には明治神宮大前において二組の結婚式が執り行われていた。その後明治記念館は、戦後を代表する結婚式場となる。

昭和二二年の開館後、挙式数は順調に増加していく(図4)。昭和二九年に三〇三一組とはじめて三〇〇〇組を超えた。昭和三八年には五〇〇〇組を超え、昭和三〇年代の後半から四〇年代の前半にピークを迎えている。昭和四〇年代の後半から結婚式の数が急速に減少していくが、この点に関して明治記念館は、次のように説明している。⁽²⁶⁾四〇年代に入ってホテルや会館に式場の設備が見られるようになり、競合の度合いが深まっていった。さらに五〇年代に入って新しく誕生した超高層ホテルなどが注目された。また、結婚式が土日に集中するようになり、結果的に挙式数が減る結果ともなった。昭和の終わりから現在までは二千数百件ほどで推移している。

神前式の普及は、これまで指摘されてきたよりも早く、昭和二〇年代の半ばから始まったと考えられる。第二次大戦後、戦争によって婚期を逸した男女による集団見合いなども行われ、結婚ブームと呼ばれる現象が起こる。明治記念館も「折からの結婚ブームという世相にも適応したもの⁽²⁷⁾」であった。それまでの結婚式は、新郎の家に新婦を迎えておこうというのが一般的で、三三九度と親戚縁者への饗応が中心であった。戦後の平和と結婚ブームの中で、しだいに結婚式は多くの人を集めた祝宴へと変わっていった。

神社の集会場や会館も、地域社会に開かれた場所として結婚式の会場に利用される場合が多かった。戦後、法制度や社会状況が大きく変化した。人々の神社を見る目はひじょうに厳しく、神社からは人が遠のいていったという。「かつては戦勝祈願に、出征兵士の武運長久に殷昌を極めた全国神社の社頭も、一朝にして閑古鳥が鳴き、ペンペン草が生える惨状が続くに至った⁽²⁸⁾」。宮地治邦の回想は、ひとり宮地だけのものではなかったであろう。しかしながら、生

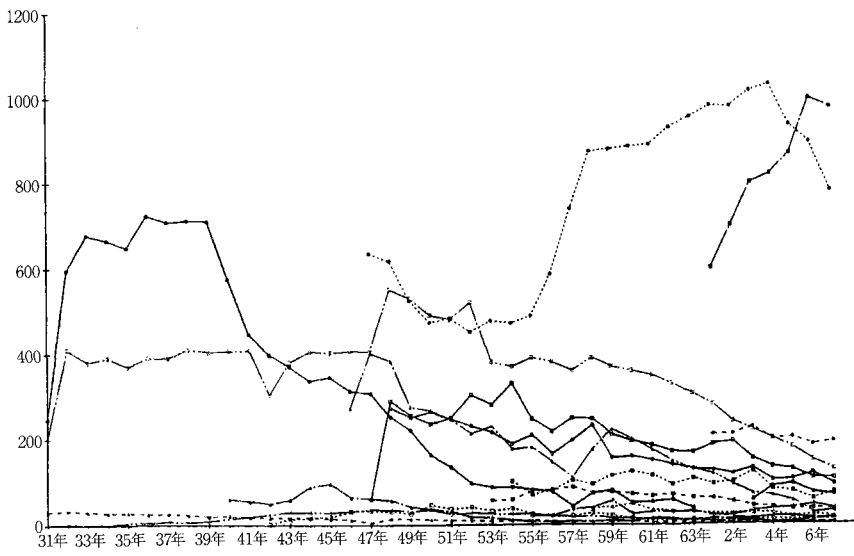


図5 神社の会館での挙式数の変化（個々の神社名は伏す）

活の中で関わりのある神社の儀礼は、初宮、七五三など生育・産育にかかわるものが多く、結婚式に關しても、慣習的に式後、氏神へ参拝することは行われていたという。そして心理的儀礼的な面で親近感のあつた神社が、披露宴とは異なつた挙式を伴う「神前結婚式」を模索し作り上げていた。当時の人々は結婚に際して、披露宴とは異なつた何らかの儀礼を求めていたのであり、当時こゝうした欲求に応えられたのが神前結婚式であつたということになる。従来の結婚式と比較して結婚式は、井上や志田が指摘するように簡便でスマートであつたかもしれないが、同時に結婚する者たちは自宅での三三九度よりも、より儀礼的なものを求めていたことになる。

要するに、神職の關与しない結婚式は一般的にならなかつたのである。戦後、公共団体が相次いで結婚式場を開設した。豊島区や台東区などに公営の結婚式場が設けられた。公営であるために、宗教色を持つことは禁じられており、披露宴のみであつたが、結果的に披露宴だけの結婚式は一般化しなかつた。神前結婚式は、昭和三〇年代になつてしだいに増加していくホテルや専門式場で

採用され、さらに多くの人々が神前結婚式を挙げるようになった。

この点は別の資料からも明らかにすることができる。神社に併設された会館の建設時期を見ると、昭和二〇年代から始まり、三〇年代に増加する(図5)。そして昭和四〇年代に最も多く建設されていることがわかる。建設の理由は「社務所を改築するにあたって多目的利用の一環として」「地域の人々の求めに応じて」「神社の維持運営をするための収益を考えて」が多くなっている。会館の建設は神社にとって、教化活動の一環として意味づけられる活動であったと同時に、新たな神社の財政基盤になるものと期待されたと考えられる。⁽²⁹⁾

ところで、明治記念館と神社の会館での挙式数の変化をみると、ほとんど同じような傾向が示されていることがわかる。昭和四〇年代・五〇年代は神前結婚式の隆盛時期にあたるにもかかわらず、挙式数は減少している。その理由として、式場自体の問題と、挙式する側の問題の三つを考えることができる。

ひとつはリノベーションである。結婚式場を選択する理由に交通の利便性と高グレード施設志向があり、近年はとくに後者の重要性が増しているという。⁽³⁰⁾ 挙式数が昭和四〇年代をピークに減少し、同時に結婚式場業に参入するホテルが増加したために、式場はリノベーションが必死となった。⁽³¹⁾ もうひとつの要因は、結婚式の曜日の集中による挙式数の減少である。近年結婚式の日取りが週末に集中する傾向が強くなっている。結婚式会場が一日に対応可能な結婚式数には限界があるため、結果的に結婚式数が減少する。そして最後に、神前結婚式ではなくチャペルウェディングに対するニーズが急増したのである。

挙式場の変化を見れば分かるように、昭和四〇年代・五〇年代の神前結婚式の隆盛は、もっぱらホテルや専門式場のそれであって神社のそれではなかった。当然ながら、その後の神前結婚式の減少は、ホテルや専門式場での減少である。

四、神前結婚式からチャペルウェディングへの交代

神前結婚式の隆盛時期の確定の難しさと比較すれば、神前式がチャペルウェディングへと変化していく様子はつぶさに観察することができる。昭和四〇年代、五〇年代に隆盛を極めた神前結婚式は、六〇年代に入つてゆっくりと減少し始める。八割ほどだった神前式と一割ほどだったチャペルウェディングの交代が起こるのは平成に入つた頃からである。

データによつて交代の時期は微妙に異なっている(図3)。BICプライダル調査では平成六年から平成七年の間でグラフは交差している。BICプライダル調査では、教会式の他に海外挙式が項目として設けられており、海外挙式がチャペルウェディングであることを考慮して、海外挙式を教会式に加えると、平成六年に交代したことになる。

同様に三和銀行調査では、平成八年にほぼ同率となっている。経済産業省調査では調査が実施された六年間の間の平成一一年か平成一二年ということになる。全国結婚式場協会調査は、平成六年に調査が終了しており、まだ神前結婚式とチャペルウェディングの交代は起こっていない。調査が継続されていれば、交代はその後ということになる。また、ゼクシイ調査によれば、調査が開始された平成六年の時点ですでにチャペルウェディングが神前結婚式を上回っている。調査が行われていれば、平成六年以前のどこかということになる。

調査対象、調査方法によつて、結果に多少のずれは見られるが、一九九〇年代のどこかで、神前結婚式とチャペルウェディングの交代が生じた⁽³²⁾と結論してまちがいない。

現状での挙式様式ごとの割合を確認しておく⁽³²⁾と、神前式が二割前後、チャペルウェディングが七割前後、一割ほどが人前式ということになる。

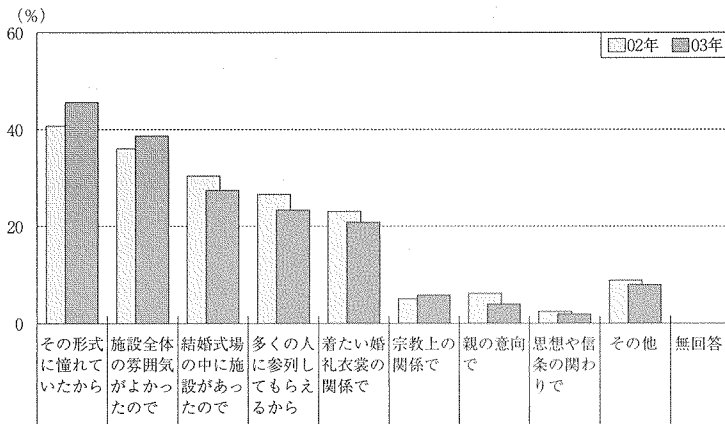


図6 挙式形式の選択理由（複数回答：『ゼクシィ2003年版115』）

次の問題は、なぜ交代が生じたかである。先に指摘したように、結婚式場業界や神社界の陰謀が神前結婚式普及の第一の要因でないとするれば、同様に神前式結婚式からチャペルウェディングへの移行も、主たる要因は実際に結婚式を行う側にあつたのではないかと考えられる。ホテルや結婚式場が利益率が高いゆえにチャペルウェディングを勧めた結果、チャペルウェディングが増加したというわけではない。華美な挙式や、過度な演出による披露宴は、結婚式場業界によるものと指摘されるが、業界に言わせれば、事情は異なるようだ。「実際には、新しいニーズに答えられない業者は見放されて経営難に陥っており、これに対応する業者はノウハウを尽くして努力し、その栄枯盛衰の中で、有望企業として存続するものと考えられる」⁽³³⁾。チャペルウェディングの隆盛も、業界による仕掛けというよりは、結婚をする者のニーズから生まれたと考えられる。ホテルオークラや帝国ホテルは、費用を費やしてわざわざ宴会場をつぶしてチャペルへと改装することになったのである。

なぜ神前結婚式が減少し、チャペルウェディングが増加していったのか。もともとキリスト教徒の少ない日本において、チャペルウェディングが信仰の表明として選ばれた儀礼ではないとすれば、どのような理由によるもののだろうか。カップルによる挙式スタイ

(挙式スタイル別解答数=100 複数回答)

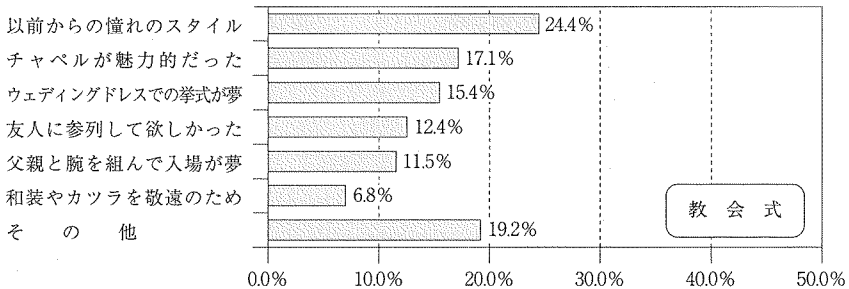
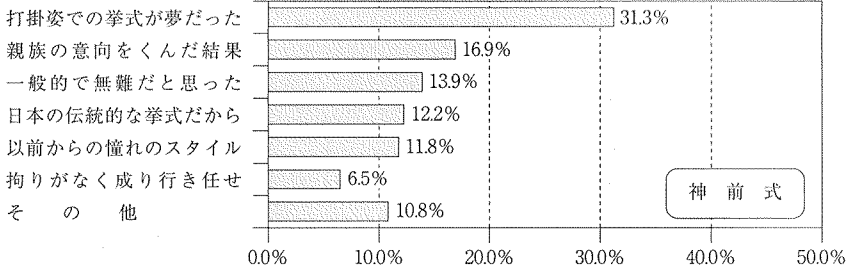


図7 挙式スタイルごとの選択理由 (『BB白書 1997年版』)

ル選択の理由を見ると次のようになる(図6)。

実際に結婚したカップルの回答によれば「その形式に憧れていたから」がもっとも多く、五割近い。次は「施設全体の雰囲気よかったので」が四割、「結婚式場の中に施設があったので」(二七・八%)、「多くの人に参列してもらえるから」(二三・五%)、「着たい婚礼衣装の関係で」(二〇・九%)と続く。質問は複数回答であり、半数のカップルが「その形式に憧れていたから」と回答している点に興味深い³⁴⁾。ここでの「憧れ」とはどのような憧れなのだろうか。そもそもチャペルウェディングに憧れる契機はどのように形成されたのだろうか。

『BB白書 1997年版』には、挙式スタイルごとの選択理由が掲載されている(図7)。

この調査が行われたのは平成八年で、神前式が三五・三パーセント、教会式が四〇・九パーセントと初めて挙式の割合が交代した年であった。神前式を選択した理由には、積極的な理由と消極的な理由が混在している。「打掛姿での挙式が夢だ

った」「日本の伝統的な挙式だから」「以前からの憧れのスタイル」といった積極的な選択とともに、「親族の意向をくんだ結果」「一般的で無難だと思った」「拘わりがなく成り行き任せ」といった回答が見られる。他方で教会式は積極的な選択を思わせる回答が圧倒的に多い。ここでも「以前からの憧れのスタイル」が多く、「チャペルが魅力的だった」「ウェディングドレスでの挙式が夢」と続いている。

現在は『B B白書 1997年版』の時点からさらに進んでチャペルウェディングが選択されているわけであるから、上記の理由での「以前からの憧れのスタイル」「チャペルが魅力的だった」「ウェディングドレスでの挙式が夢」への関心も高くなっているにちがいない。そして反対に神前式の「打掛姿での挙式が夢だった」「日本の伝統的な挙式だから」「以前からの憧れのスタイル」は関心が薄くなったということになる。ところで、現在、⁽³⁵⁾ 挙式スタイルを決定しているのは両親や親族ではなく、結婚式を挙げる二人、とくに新婦であることが分かっている。挙式スタイルの積極的選択には新婦の意向が強く働いていると考えられる。

おわりに

一九九〇年代になって急速な変化を見た、ということは時代的な変化が大きく作用したか、あるいは世代的な問題が関わっていると考えることができるとは。一九九〇年代の大きな変動は経済の領域で生じた。一九九〇年代になってバブルが崩壊し、平成不況が長らく続くことになった。結婚式をめぐる費用も減少していった。それでは、神前式結婚式からチャペルウェディングへの移行が、経済的な理由によるものなのかというと、そうした理由でチャペルウェディングを選択したという根拠はない。

一九九〇年代になってチャペルウェディングへの志向が強くなったとすると、この時期結婚したカップルの生年は

おおよそ一九七〇年代となつて、いわゆる団塊ジュニア世代と呼ばれる世代である。昭和四六年から昭和四九年の四十年間は、毎年二〇〇万人を超える出生があり、第二次ベビーブームという。この世代がチャペルウェイディングを選択したとすれば、影響は団塊の世代である親からと彼らが育つてきた時代環境ということになる。団塊の世代の結婚式がほとんど神前式で行われていたことは、色川大吉の分析でも指摘されていた。筆者は、当時の社会との間で大きな軋轢を感じ、多様な運動を興した団塊の世代が神前式を選択した点を指摘したが、その理由は目下のところ明言できない。団塊ジュニアのチャペルウェイディング志向も、そうした事実を指摘するにとどめざるをえない。

もう少しタイムスパンを長くとなれば、戦後の社会構造の変化を背景にした日本人の価値観やライフスタイルの変化を読み取るとはさほど難しい作業ではない。戦後の「家」や地域共同体の崩壊は、結婚式の場所、結婚式に集まる人々の範囲や人数、挙式の様式の決定者をはじめ、いたるところで確認することができる。仲人の急速な減少や、海外挙式の増加は、こうした変容の象徴的な現象である。平成六年に仲人を立てた結婚式は六四パーセントだったのに、平成一五年には四パーセントにまで減少した(図8)。結納・両家の顔合わせもおおよそ三割に減っている⁽³⁶⁾。地域共同体や親族構造を背景とした「家」と「家」の結合の儀礼としての結婚式は、明らかに個人と個人が愛情によつて結ばれる事実を表明して見せる儀礼へと変化した。

結婚式で注目すべきことは、本論の冒頭で指摘したように、戦後の価値観やライフスタイルの変化を考えたときに、脱儀礼化が進行してきたと考えられるにもかかわらず、結婚式は逆に儀式化が進んだ点である。披露宴の前に挙式が行われることが当たり前になった。ある時は神前式がまた別の時にはチャペルウェイディングが行なわれたわけで、宗教者の関与する儀礼が望まれたのである。『BB白書 2000年版』は、「披露宴なしの結婚式は増加しているが、挙式のない結婚式はほとんどない」と指摘している⁽³⁷⁾。

挙式日へのこだわりは強くなっている。土曜日・日曜日に八割が集中している。そして六輝を重視したカップルが

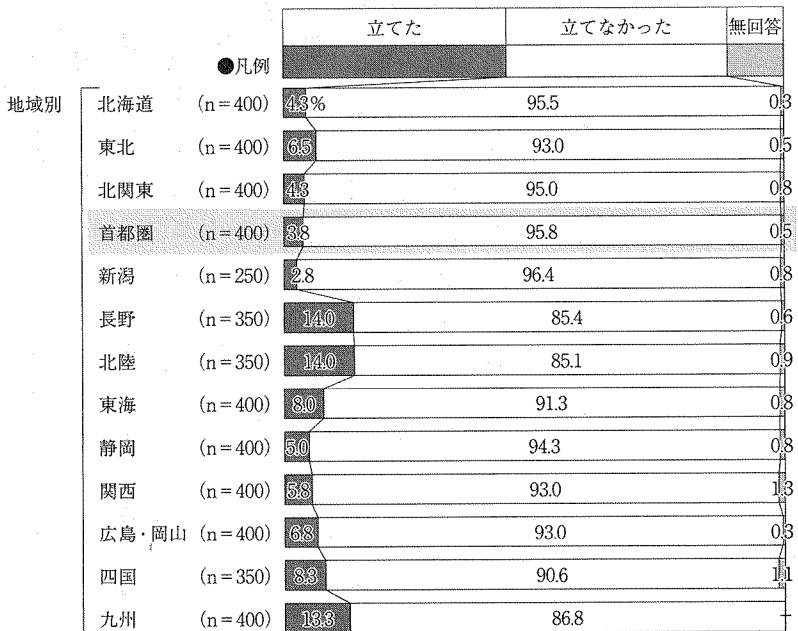
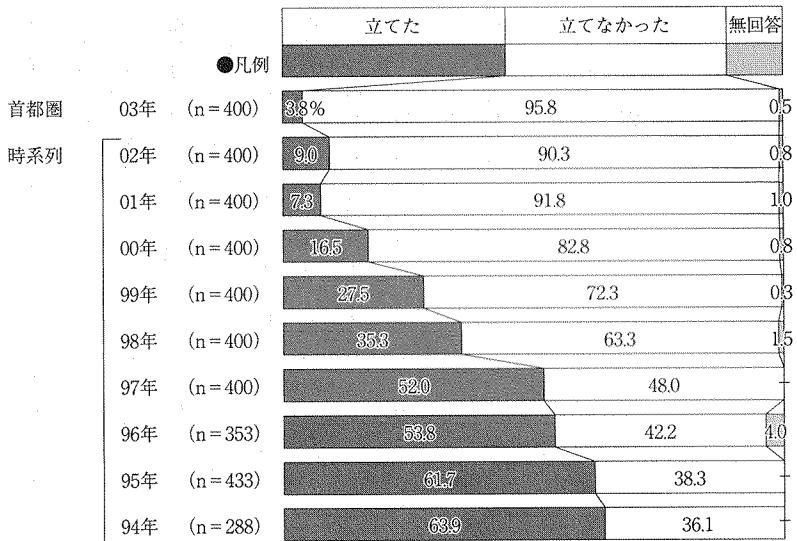


図8 仲人の変化

六割を超えている。ゼクシイの調査では、この傾向は強まっている。⁽³⁸⁾戦後、伝統的な儀礼文化がつきつきと消えていく中で、相対的に結婚式の重要性は増すことになった。誕生にまつわる儀礼は、子どもが病院で生まれることで消えていった。共同体の崩壊とともに社会的承認の機会としての成人式は形骸化した。初宮詣りや七五三は、親の行事であつて本人の自覚は低い。高齢化とともに厄よけは盛んになり、葬儀を自らの儀礼として実施しようとする傾向が見られるようになった。しかしながら、盛んになった儀礼は「目出度い」儀礼ではない。

人の一生で、自らが選び、自覚的に儀礼の主役となることのできる儀礼は限られている。多くの人にとって結婚式は、人生で唯一の「ハレ」舞台であり、特別な機会となった。特別な機会は儀礼という形式で表現される。それは披露宴ではなく、聖性を伴った儀礼でなくてはならないのか。結婚こそが人生最大の節目であり幸福であるとすれば、「幸せ」を演出するための「厳粛な」儀礼がどうしても必要となる。幸せを演出する儀礼は、時代によって異なるだろう。戦後のある時期、神前式はモダンでスマートな儀式として映った。しかしながら神前式はチャペルウェディングとの対比の中で、「伝統」のイメージをまとい「家」や「忍耐」を連想させることになった。他方でチャペルウェディングは、個人と個人が愛情によって結ばれる幸せを表現するのに、ふさわしい儀礼として受け止められたのではないか。

註

(1) 芳賀登『成人式と通過儀礼 その民俗と歴史』雄山閣、平成三年、三頁。

(2) 本論では、神前結婚式がいつどのように始まったかについては扱わない。この点に関しては平井直房「神前結婚式の源流」(『神道と神道教化』國學院大學神道学料資料室内平井直房教授古稀祝賀会、平成五年)参照。

(3) ウイルソン『現代宗教の変容』井門富二夫・中野毅訳、ヨルダン社、昭和五四年、三六一―三七頁。

- (4) 端信行編『現代日本文化における伝統と変容2 日本人の人生設計』ドメス出版、昭和六一年。この論文は井上忠司「家庭」という風景―社会心理史ノート（日本放送出版協会、昭和六三年）に収録されているが、ほとんど内容は変わっていない。
- (5) 色川大吉『昭和史世相編』小学館、平成二年。初出は『春秋生活学』第五号、小学館、平成元年。
- (6) 東洋経済新聞社。志田は吉田民人『社会学の理論で現代のしくみ』の中で「結婚式―なぜ披露宴はハデハデか」を書いている。
- (7) 『明治聖徳記念学会紀要 復刊第三十号』平成二二年。
- (8) 井上忠司「結婚風俗の変遷―「神前結婚」を中心に」端信行編『現代日本文化における伝統と変容2 日本人の人生設計』ドメス出版、昭和六一年、四二頁。
- (9) 同、三九頁。
- (10) 同、四三頁。
- (11) 同様の指摘は、しばしばクリスマスやバレンタインデーの定着についても指摘される。つまり、クリスマスはケーキ業界の、バレンタインデーはチョコレート業界の陰謀によるものだとする指摘である。一見して分かりやすい理由であるが、具体的な定着過程を考察すると、まったく事実と異なることが理解できる。石井研士『都市の年中行事』（春秋社、平成六年）参照。
- (12) 色川大吉『昭和史世相編』小学館、平成二年、一六九頁。
- (13) 同、一八五頁。
- (14) 同、二一四頁。
- (15) 同、二一四―二二五頁。

- (16) 志田基与師『平成結婚式縁起』東洋経済新聞社、平成三年、一八頁。
- (17) 平井、前掲書、一九一二〇頁。
- (18) 『昭和・平成ブライダル総覧』全国結婚式場協会、平成九年。
- (19) 講演の終了後に用紙を配布し、項目の説明を行いながらアンケートに記入させた。個々の調査の回収数は記載されていないが、毎回五〇〇名前後であるという。(『昭和・平成ブライダル総覧』全国結婚式場協会、平成九年、一一五頁。
- (20) 一九八九年にVol.1を刊行して以来、毎年『B B白書』を作成してきたが、『(2000年版) B B白書』(平成一二年)を最後に調査は実施されていない。B I Cブライダルの母体は貸衣装業界のトップといわれた株式会社斉憲であるが、斉憲は平成一五年に民事再生手続きをとった。調査自体はBig Bridal Research Inc.となっている。
- (21) 『三和銀行調査レポート 挙式前後の出納簿』No.202、平成一〇年。
- (22) 報告書は多数刊行されているが、『ゼクシィ結婚トレンド調査2003』(株式会社リクルート ゼクシィ、平成一五年)に過去のデータが集約されている。
- (23) 通商産業大臣官房調査統計部『平成8年特定サービス産業実態調査報告書 結婚式場業編』社団法人通産統計協会、平成九年、年経済産業省経済産業政策局調査統計部『平成14年特定サービス産業実態調査報告書 結婚式場業編』経済産業統計協会、平成一五年。
- (24) 『20歳前後の女性が思い描く挙式・披露宴調査』財団法人東海冠婚葬祭産業振興センター、平成一〇年、(調査方法：愛知県、岐阜県、三重県在住の一八〜二〇歳の未婚の女性。調査方法：無作為抽出し、郵送法により調査を実施。調査期間：平成一〇年一〇月五日〜一月六日。回収状況：配布票 三〇〇〇票、有効回収票四三八票(回収率一四・六%)。『東海地域の未婚男女の結婚に関わる儀式に対するニーズ』財団法人東海冠婚葬祭産業振興センター、平成一三年、(調査方法：愛知県、岐阜県、三重県在住の二〇代の未婚男女。調査方法：無作為抽出し、郵送法により調査を実施。調査

- 期間：平成一三年一月一日～一月二五日。回収状況：配布票 三二〇〇票、有効回収票四二一票（回収率一三・三％）。
- (25) 明治記念館五十年誌編纂委員会編『明治記念館五十年誌』平成一〇年、一〇一―一二頁。
- (26) 同、九四頁。
- (27) 同、一四頁。
- (28) 宮地治邦「戦後十年の神道界を顧みて」『神道宗教 第十号』昭和三〇年、三七頁。
- (29) 石井研士「戦後の社会変動と神社神道」大明堂、平成一〇年、一二九―一三一頁。
- (30) 平成二年アンケート。『昭和・平成ブライダル総覧』全国結婚式場協会、平成九年、八〇―八一頁。
- (31) 一九九四年調査。同、九七―九八頁。
- (32) 地域的な差異が存在する。
- (33) 『昭和・平成ブライダル総覧』全国結婚式場協会、平成九年、七九頁。
- (34) 株式会社リクルート・ゼクシイ『結婚トレンド調査2003年』平成一五年、一二五頁。
- (35) 同、一―四頁。
- (36) 同、三〇―三八頁。
- (37) BICブライダル『BB白書 2000年版』平成一二年、四九頁。
- (38) 株式会社リクルート・ゼクシイ『結婚トレンド調査2003年』平成一五年、一二七頁。